

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H00106

研究課題名（和文）養育環境リスク要因の累積が人間発達に及ぼす長期的影響性と影響防御機序の解明

研究課題名（英文）Exploring the Long-Term Effects of Cumulative Environmental Risk Factors on Human Development and Resilience Mechanisms.

研究代表者

菅原 ますみ（Sugawara, Masumi）

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号：20211302

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 25,300,000円

研究成果の概要（和文）： 予防医学の逆境的小児期体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）研究と心理学のレジリエンス研究を統合的に継承し、養育環境リスクとその影響を防御する要因の検討を行った。乳児期から追跡子どもが成人した家族の調査（2,667名）、一般人口調査（20歳～79歳、12,980名）、大学生調査（4,120名）等から、成人期の心身の健康とACEsは関連するものの、小児期及び現在の肯定的体験（Protective and Compensatory Experiences）の有効性が確認され、ACEsを有する人々に肯定的体験を積極的に作っていくことの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

虐待や家庭の機能不全、いじめ等の逆境的小児期体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）とACEsの悪影響を緩和する小児期及び成人期での防御・補償的体験（Protective and Compensatory Experiences: PACEs）を同時に検討することを可能とする有力な国際的尺度の日本語版を作成し、当該領域の研究活性化に貢献しうると考えられる。また、幼少期よりの長期追跡調査や幅広い年齢層を対象とした大規模調査によって、ACEsやPACEsの我が国における実態の把握とその影響性を検討するための希少なデータを得たことも学術的意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）： By integrating research on Adverse Childhood Experiences (ACEs) from Preventive Medicine and Resilience studies from Psychology, we examined the risks associated with the child-rearing environment and factors that prevent their negative impact. We conducted surveys that included family members whose children were followed from infancy through adulthood (N=2,667), the general population aged 20 to 79 (N=12,980), and college students (N=4,120). Our findings showed that mental and physical health in adulthood and ACEs are related. However, we also discovered that positive experiences (Protective and Compensatory Experiences) in both childhood and the present are effective in mitigating the negative effects of ACEs. Given these results, the importance of providing positive experiences to those who have experienced ACEs is suggested.

研究分野： 発達精神病理学

キーワード： 逆境的小児期体験 レジリエンス 生涯発達 養育環境リスク要因

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

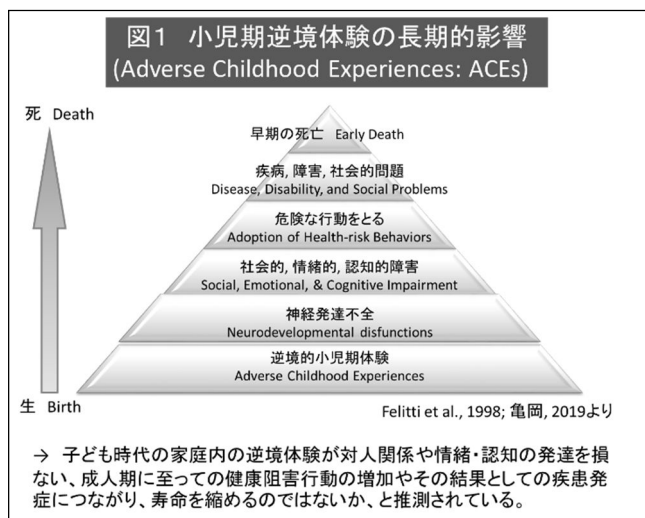
1. 研究開始当初の背景

(1) 逆境的小児期体験に関する予防医学的研究

貧困や虐待、親の人格障害や長期的な精神病理、両親間の不和・暴力、劣悪な学校・地域環境など、長期にわたって継続する養育環境上の逆境は、日常生活のなかで持続的なストレスを子どもたちに与え続け、幼いほど自力で抜け出すことが困難である。虐待が起こる背景には上記のようなリスクの累積が親子の生育歴に複雑に絡んで存在しており、世代を超えた小児期における逆境の影響性が指摘されてきている。虐待や貧困の世代間伝達を防いでいくことは我が国において急務であり、養育環境上のリスク要因の累積に注目し、心身の発達に及ぼす長期的影響性に関するエビデンスを積み上げることで、より強力な政策や制度の策定に貢献することが発達科学領域の研究者に強く求められている。

近年の予防医学領域では、こうした養育環境上のリスク要因について、逆境的小児期体験 (Adverse Childhood Experiences: ACEs, Felitti et al., 1998; Anda, Felitti et al., 2006) として概念化し、虐待的養育と家庭の機能不全に関する家庭内要因 (intra-familial factors) の加算的体験が成人期以降の広範囲な心身の健康リスクとなることを明らかにしてきた (図1)。Felitti の共同研究者である Anda (2006) は、ACEs と慢性的で重篤なストレスによる特定の脳神経系の異変や機能不全によって引き起こされると考えられる病理群 (うつ病、不安、睡眠障害、肥満、薬物乱用、記憶損傷、性に関する問題行動、怒りの統制不全、ドメスティック・バイオレンス等) との関連性について、

17,337 名の一般成人を対象とした調査から、ACEs の加算値が大きくなるほどこれらの諸病理の発現率が上昇するという直線的な関係性を確認した。Felitti らの家庭内での ACEs の指標はその後多くの研究で継承され、Hughes らが 2017 年に報告したメタ分析でも (37 研究, 総サンプル数 = 253,716 名) 同様な結果が報告されている。



ACEs の体験率は一般人口中에서도予想以上の高率にあることが知られてきており、Anda ら (2006) のアメリカの研究 (17,337 名) では 1 つ以上の体験者が 63.9%、イギリスの Bellis ら (2014, N=3,885 名) でも 48% だった。日本においても、Fujiwara らのグループ (Fujiwara et al., 2011; Amemiya & Fujiwara et al., 2017) が検討をおこなっており、一般人口中の成人の 31.9% が 1 つ以上の ACEs を報告し、ACEs の累積とともに精神疾患の発症率が高まることや、65 歳以上の対象者群 (19,220 名) においても 36.3% が同様に 1 つ以上の ACEs の体験があり、その累積が老人期での高次機能障害の発生率の上昇と関連すると報告されている。

以上のように、Felitti と Anda に始まる家庭内 (intra-familial) での虐待と家庭の機能不全に関する ACEs と成人期の心身の健康問題との有意な関連性は、メタ分析を含め多くの研究で繰り返し確認され、頑強 (robust) なものであると結論づけられる。これまでのところ、海外においても日本においても、ACEs について乳児期からの長期的な縦断データを用いた逆境的小児期体験の成人期に至るまでの影響性に関する研究は少ない。本研究では、0 歳から 14 歳まで経年で養育環境の影響性について測定を繰り返しているコホートサンプル (首都圏 1 都市の 500 世帯、2020 年度の対象の子どもの年齢は 18 歳) と、登録時 0 歳 ~ 15 歳で 15 年間にわたって隔年で追跡を繰り返している双生児サンプル (全国の 500 組 1,000 名) の申請者らの 2 つの縦断サンプル (1,000 世帯 1,500 名、18 ~ 36 歳) の子どもたちを対象に、早期成人期に至った時点で、小児期に体験した逆境関連のリスク要因が心身の健康問題の発現にどの程度関連するか、逆境の体験年齢 (developmental timing) や体験の持続期間 (duration) に注目した追跡調査を経て検討することを第一の目的とした。

(2) 発達心理学における累積リスクと防御要因に関する研究

発達精神病理学 (Developmental Psychopathology) の領域では、1970 年代からこうした逆境体験の有り/無しによる加算型の逆境指標は「累積リスク (Cumulative Risk: CR)」と呼ばれ、子ども時代の健全な心理発達を阻害するものとして様々な検討がなされてきた。また、CR の影響性を防ぐ防御要因 (protective factors) の探究が重視されてきている。同様な逆境体験を経ても疾患や問題行動の発現をみなかった人々のレジリエンス (resilience, 回復力) を検討していく際には、こうした環境的な防御要因の特定やそれが発動するメカニズムを探究していくことが重要になってくると思われる。本研究では第二の目的として、いつ・どのような防御要因の発動が有効か、またその発動機序はどのようなものか探索的な検討をおこなうこととした。

(3) 逆境指標の拡張と測定尺度の改善

医学領域における ACE の指標が虐待と家庭の機能不全に注目した intra-familial なものが中心であるのに対し、発達心理学や発達精神病理学における累積リスク (CR) の指標は、extra-familial なリスク要因を加えたより広いパースペクティブを有している。今後、レトロスペクティブな方法によって測定される成人期を対象とした ACEs 研究と、幼少期からのプロスペクティブな方法によって測定される CR 研究が学問領域を超えて融合的に進展していくためには、ライフスパンを通して使用可能な逆境指標のセットや数値化の原則を共有出来ていくことが望ましい。そのためには、発達段階を考慮したうえでの適切な測定尺度が必要になる。そこで本研究の第三の目的として、ACEs および CR に関する実証的な検証により適切である尺度はどのようなものが探究をおこなうこととした。

2. 研究の目的

本研究は、上記に述べた 3 点 (下線部分): 乳幼児期からの養育をリスク要因の早期成人期における心身の健康や適応に及ぼす長期的影響性に関する検討、リスク要因の悪影響を緩和する防御要因の特定とその発動機序の探究、養育環境に関するリスク要因と防御要因に関する実証研究に適した測定尺度の探究を目的として実施された。

3. 研究の方法 本研究は 2020 年度～2022 年度の 3 年度にわたって以下の流れで実施した:

2020 年度	ACEs と CR およびその防御要因 (レジリエンス要因) に関する先行研究および既存測定尺度・評価票の総覧 追跡調査の立案・実施 (対象: 18 歳～35 歳の成人期の子どもと両親計 3,500 名): 乳児期より追跡を継続しているサンプルに対する成人期の調査を実施する COVID-19 の感染拡大のため翌年度以降に延期することとなった。 全国大学生を対象としたウェブ調査: 申請当初の予定にはなかったが、COVID-19 によるパンデミックの影響を含めた ACEs とその影響を防御する要因に関する検討をおこなった (全国の 4 年制および 6 年制大学の大学生 4,210 名)
2021 年度	実施を延期した の長期追跡調査の実施 社会的養護にある青年の調査: 申請当初の予定にはなかったが、逆境的小児期体験を高頻度で体験している社会的養護 (養護施設及び里親家庭) にある高校生を対象とした追跡調査を企画しサンプル登録を開始した。
2022 年度	2021 年度に開始した の追跡調査の終了、解析および成果発表 2021 年度に計画し実施し始めた の社会的養護にある高校生調査の継続 2020 年度の の総覧研究より今回の申請者の研究の理論的枠組みとなった ACEs/CR とその影響防御過程に関する ICARE モデル (Intergenerational and Cumulative Adverse and Resilience Experiences: ICARE) に関する書籍の翻訳の完了・出版: 『Adverse and Protective Childhood Experiences: A Developmental Perspective』 (Jennifer Hays-Grudo & Amanda Sheffield Morris, 2020, APA Publishing) 2020 年度の の総覧研究より抽出された今回の研究目的と合致する 2 種類の尺度 (Maltreatment and Abuse Chronology of Exposure: MACE 尺度, Teicher & Parigger, 2015・Protective and Compensatory Experiences: PACEs 尺度, Hays-Grudo & Morris, 2020) の日本語版開発および妥当性検証のための短期縦断調査の実施 一般人口中の成人を対象としたウェブ調査: 大規模サンプル (対象: 20 歳～79 歳, 12,980 名) を対象とした MACEs および PACEs と成人期における心身の健康状態に関する総合的調査の実施

4. 研究成果

主な成果として以下の知見を得た:

(1) 乳幼児期からの養育環境リスク要因の早期成人期における心身の健康や適応に及ぼす長期的影響性に関するプロスペクティブな検討

対象者と手続き: 乳幼児期に開始した縦断研究に参加している 18 歳～41 歳 (平均 26.9 歳, SD = 6.07) の男女に、紙媒体の郵送あるいは web での調査を依頼した。有効回答は 1,029 名 (女性 55.8%) であった。使用尺度は、ACEs との関連が示唆されてきている心身疾患の既往歴 (成

人病関連の疾患、がん、うつ病、不安障害、ストレス関連精神疾患等について、既往歴あり/なしで回答) 健康リスク行動の指標として問題飲酒行動尺度、CES-D (20 項目, Radloff, 1977) 現在の心理的適応状態を測定する指標として Buss-Perry 攻撃性尺度、UCLA 孤独感尺度、人生満足感 (Diener, 1985) 逆境的小児期体験 (ACEs): 18 歳以前での虐待的被養育経験 (身体的/ネグレクト/心理的)・家庭の機能不全 (親との離死別/親の精神病理/夫婦不和/逮捕) に関する 10 項目および保護的・補償的小児期体験 (PACEs): 18 歳以前での肯定的な対人関係や活動、良好な教育環境等に関する 10 項目 (ともに Hays-Grudo & Morris, 2020) ACEs については、初発年齢と持続期間を測定した。

結果と考察: 1 つ以上の ACE 体験者は 33.2% で Amemiya ら (2017) の 65 歳以上 (19,220 名) の 36.3% と同程度だった。健康リスク行動、抑うつ傾向、怒りの制御困難、孤独感、人生満足感を従属変数とした住改分析の結果 (表 1) ACEs はネガティブな、PACEs はポジティブな方向にそれぞれ有意な主効果が見られた。睡眠障害、うつ病、ストレス関連心疾患 (適応障害、PTSD 等) の発症の有無については二項ロジスティック回帰分析を実施した結果、それぞれの発症について ACEs の有意な関連が認められた。ACEs を初めて体験した時期を乳幼児期 (0 歳 ~ 5 歳) と児童期以降 (6 歳 ~ 18 歳) の時期に分けて検討したところ、児童期以降での体験初発群より乳幼児期体験初発群のほうが有意な関連を示す変数が多いことが示され、逆境を体験した発達時期による影響性の相違が示唆される結果を得た (2023 年度第 35 回日本発達心理学会で発表予定)。

表 1 ACEs および PACEs と成人前期での心身の健康との関連

	健康リスク行動		心身疾患既往歴			心理的適応状態		
	問題飲酒 (問題飲酒尺度)	睡眠障害 (あり=20名)	うつ病 (あり=39名)	ストレス関連心疾患 (適応障害、PTSD等、17名)	抑うつ傾向 (CES-D)	怒りの制御困難 (Buss-Perry尺度)	孤独感 (UCLA孤独感尺度)	人生満足感 (Diener尺度)
基本属性								
年齢	.39**	.02	.01	-.02	-.01	.10**	-.01	.05
性別 (1=男性・2=女性)	-.12**	.42	.81*	2.00**	.07*	.15**	-.02	.03
現在の経済状態 (1=貧しい~5=豊か)	-.00	.68*	.30*	.23*	.12**	.04	.17**	-.26**
小児期体験 (18歳以前)								
ACEs (逆境の体験)	.09*	.38*	.36**	.53**	.23**	.13**	.21**	-.13**
PACEs (保護的・補償的体験)	.01	.17	-.26*	.04	-.12**	-.08*	-.17**	.10**
R^2	.16***	.08*	.10**	.14**	.10**	.06*	.12**	.11**

注: 心身疾患既往歴 (睡眠障害、うつ病、ストレス関連心疾患) は二項ロジスティック回帰分析 (表中の数字はβ)、それ以外は重回帰分析 (表中の数字はβ) の結果を示す

(2) 小児期体験と成人前期におけるパーソナリティ障害傾向との関連 - 内在化型問題への媒介モデルの検討 -

対象者と手続き: 対象は長期縦断研究に参加している 18 歳 ~ 41 歳 (平均 26.9 歳, SD = 6.07) の男女で、有効回答は 1,029 名 (女性 55.8%)。使用尺度: パーソナリティ障害傾向を測定する PID-5-BF (25 項目, 5 特性の α 係数は、.64 ~ .77) 小児期逆境体験 (ACEs): 18 歳以前での虐待的被養育経験 (身体的/ネグレクト/心理的)・家庭の機能不全 (親との離死別/親の精神病理/夫婦不和/逮捕) に関する 8 項目および小児期防御・補償体験 (PACEs): 18 歳以前での肯定的な対人関係や活動、良好な教育環境等に関する 10 項目 (ともに Hays-Grudo & Morris, 2020) 抑うつ傾向: CES-D (20 項目, Radloff, 1977)。

結果と考察 探索的な重回帰分析の結果、ACEs と PACEs はともに PID-5-BF 得点に対して独立に主効果を持つことが明らかになったので、ACEs と PACEs をそれぞれ起点とし、PID-5-BF の 5 つの特性得点を媒介して抑うつ傾向に至るモデル (図 2) によるパス解析をおこなった。モデル適合は CFI = 1.000, RMSEA = 0.032 と良好であり、ACEs は 5 特性全てに正のパスが有意となり、抑うつ傾向に対する直接的なパスも有意となった。PACEs は PID-5-BF の対立以外の特性に対して負のパスが有意となった。ACEs, PACEs とともに後年のパーソナリティ障害傾向に影響性を有する可能性が示唆され、また PID-5-BF の得点を媒介して抑うつ傾向に至るパスも有意となり、概ね仮説モデルが支持された (2022 年度第 31 回日本パーソナリティ心理学会で発表)。

< パーソナリティ障害関連特性 (PID-5-BR) >

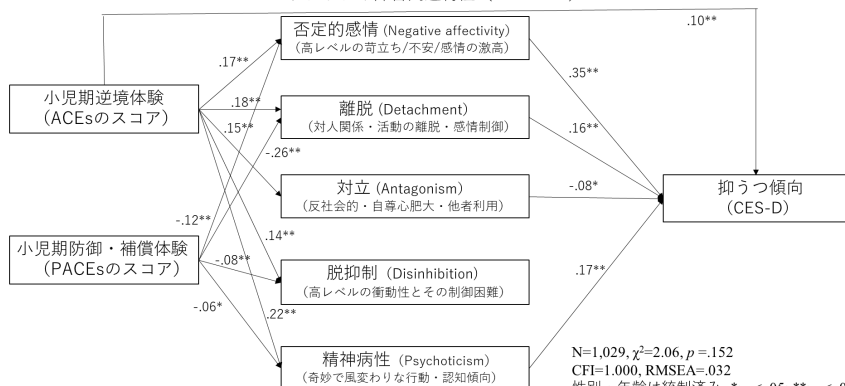


図 2 小児期体験と成人期のパーソナリティ障害傾向、抑うつ傾向との関連

(3) コロナ禍での大学生の精神的健康と小児期体験

対象者と手続き: 2021 年 10 月に実施した 4 年制および 6 年制大学の学生を対象としたオンライン調査に回答した全国 47 都道府県の大学生 4,120 名 (男子 42.1%・女子 57.9%, 平均年齢 20.66 歳) 測定尺度は、小児期逆境体験 (ACEs): 18 歳以前での虐待的被養育経験・家庭の機能

不全に関する10項目 (Hays-Grudo & Morris, 2020)、小児期防御・補償体験 (PACEs): 18歳以前での肯定的な対人関係や活動経験に関する10項目 (Hays-Grudo & Morris, 2020)、居住地のコロナ感染状況 (都道府県別の累積感染者数と人口から算出した指数)、大学の授業の対面・オンライン状況 (全面的に対面~全面的にオンラインの5件法)、オンライン上のソーシャルサポート: e-support 尺度10項目 (Canale et al., 2021)、基本属性 (性別・年齢・独居/同居・コロナ禍で所得の増減)、精神的健康はCES-D (Radloff, 1977) 20項目を用いた。

結果と考察: 1つ以上のACEsの体験率は27.3% (1,126名)、4つ以上は5.9% (243名)で、男子の得点のほうがやや低かった ($p < .05$)。CES-D (抑うつ傾向) を従属変数とする重回帰分析では (表2)、ACEsは正の、PACEsは負の有意な主効果が見られ、コロナ禍というストレスに対する脆弱性にも小児期体験が影響する可能性が示唆された。居住地の感染状況、年齢、居住形態とは有意な関連が見られず、性別 (女性のほうがCES-Dが高い)、オンラインでの授業頻度 (オンラインが多いほどCES-Dが高い)、所得の減少、オンライン上でのソーシャルサポートがそれぞれ有意な関連を示し、コロナ禍での現況の困難に加えて小児期逆境体験が多く防御・補償体験が少ないことが精神的健康のさらなる悪化をもたらすと考えられる (2021年度第33回日本発達心理学会で発表)。

表2 コロナ禍における大学生の抑うつ傾向と小児期体験 (重回帰分析)

<抑うつ傾向 (CES-D) との関連>	標準化係数 β	t-値	有意確率
(定数)		21.657	
性別 (1=男性 2=女性)	.089	6.100	**
年齢	-.025	-1.699	n. s.
居住地 (都道府県) の感染状況 ¹⁾	.002	0.164	n. s.
本人可処分所得の増減 (1=かなり減った~5=かなり増えた)	-.125	-8.458	**
居住形態 (1=独居 0=同居)	.026	1.756	n. s.
オンライン授業度 (1=全て対面授業~5=全てオンライン授業)	.044	2.975	**
オンラインサポート (オンラインで相談や情報供給、 気晴らしや癒し、励ましてくれる相手との交流頻度)	-.118	-7.799	**
ACE (小児期逆境体験数、0~10点)	.201	13.814	**
PACE (小児期補償体験数、0~10点)	-.198	-13.066	**

調整済み $R^2 = .136^{**}$; **: $p < .01$

¹⁾ 2021年10月29日現在の各都道府県の累積コロナ感染者数を人口で除したもの

(4) 逆境の小児期体験とその影響を防御・補償する肯定的小児期体験の測定 - 日本語版 PACE 尺度と MACE-52 に関する大規模調査から -

対象者と手続き: 全国の20歳以上の成人を対象とした2つのweb調査を実施した。調査1 (2週間間隔の短期縦断調査) の対象となったのは47都道府県在住の20歳~81歳 (平均47.15歳, SD=15.01) の379名 (男性56.7%) が、調査2 (横断調査) では同じく47都道府県在住の20歳~79歳 (平均49.91歳, SD=17.24) の12,770名 (男性49.7%) が対象となった。いずれも2023年3月に施した。使用尺度は、調査1では、10領域 (親からの虐待5領域、友人からのいじめ2領域、性的虐待、両親/きょうだいへのDV目撃2領域) 計52項目のMACE-52, 10項目 (無条件の愛され体験、信頼できるおとなの存在、安全な住環境、適切な学校、社会貢献、スポーツ、趣味の有無等) のPACE尺度を2時点で実施した。両尺度とも原作者とともに日本語訳・バックトランスレーションをおこなった。調査2では、MACE-52, PACE, PACE成人期版、精神的健康度 (抑うつ傾向: PHQ-9, 不安傾向: GAD-7, 人生満足度: SWLS) について尋ねた。

結果と考察: 2時点間相関 MACE-52は $r = .885$ ($p < .01$), PACEは $r = .673$ ($p < .01$) と満足できる値が得られた。また精神的健康度 (PHQ-9, GAD-7, SWLS) を従属変数とした重回帰分析を実施したところ、概ね予測される方向での関連が見られた (表3)。小児期の家庭の困窮や逆境的体験の負の影響性が示唆されたが、同時に小児期および現在の肯定的体験の主効果も観測され、とくに人生満足度に対する現時点での肯定的体験の効果量 (β) の相対的な大きさは ($\beta = .386$, $p < .01$)、ACEsの影響性を乗り越えるための有力な要因として注目すべきものと考えられる (2023年度第32回日本パーソナリティ心理学会で発表予定)。

表3 逆境的小児期体験 (MACE-52) と肯定的小児期体験 (PACE) および肯定的現在体験 (PACE成人期版) との関連 (N = 12,770)

	抑うつ傾向: PHQ-9		不安傾向: GAD-7		人生満足度: SWLS	
	B	β	B	β	B	β
(定数)	1.436		1.992		24.353	
性別 (1=男性、2=女性)	1.142	.097 **	.713	.073 **	-.223	-.016 *
年齢 (20歳~79歳)	-.059	-.171 **	-.049	-.173 **	.005	.012 n. s.
学歴 (1=小学校~8=大学院)	.074	.024 **	.060	.023 **	.021	.006 n. s.
幼少期の暮らし向き (1=貧しい時期なし、2=貧しい時期があった)	.872	.066 **	.681	.062 **	-.384	-.024 **
暮らし向き/現在 (1=豊か~5=貧しい)	1.086	.160 **	.739	.132 **	-2.556	-.314 **
逆境的小児期体験: MACE-52	.236	.220 **	.189	.215 **	-.085	-.066 **
肯定的小児期体験: PACE	.015	.007 n. s.	-.035	-.019 *	-.093	-.036 **
肯定的現在体験: PACE成人期版	-.462	-.232 **	-.297	-.181 **	.921	.386 **
adj R^2	.255**		.209**		.343**	

*幼少期の暮らし向き: 小中高時代の暮らし向き *: $p < .05$, **: $p < .01$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 14件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Silventoinen Karri, Li Weilong, Jelenkovic Aline, Sund Reijo, Yokoyama Yoshie, Aaltonen Sari, Piirtola Maarit, Sugawara Masumi, Tanaka Mami, Matsumoto Satoko, Baker Laura A., et,al.	4. 巻 46
2. 論文標題 Changing genetic architecture of body mass index from infancy to early adulthood: an individual based pooled analysis of 25 twin cohorts	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Obesity	6. 最初と最後の頁 1901 ~ 1909
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41366-022-01202-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Saito Aya, Matsumoto Satoko, Sakata Yukina, Sugawara Masumi	4. 巻 -
2. 論文標題 The Relation Between Autism Spectrum Disorder Traits, Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder Traits, and Emotional Problems in Japanese University Students	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Advances in Neurodevelopmental Disorders	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s41252-022-00311-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakata Yukina, Sugawara Masumi, Matsumoto Satoko, Saito Aya, Yoshitake Naomi	4. 巻 93
2. 論文標題 Relationship between autistic traits and depression among married couples	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 292 ~ 299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.93.20052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齊藤彩	4. 巻 19
2. 論文標題 大学生の自閉スペクトラム症傾向および友人からのサポートと精神的健康の問題との関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 161 ~ 172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sakata Yukina, Sugawara Masumi, Matsumoto Satoko, Saito Aya, Yoshitake Naomi	4. 巻 93
2. 論文標題 Relationship between autistic traits and depression among married couples	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 292 ~ 299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.93.20052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原ますみ	4. 巻 4
2. 論文標題 小児期逆境体験に関する発達研究の動向－影響緩和要因に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Precision Medicine	6. 最初と最後の頁 589 ~ 595
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原ますみ	4. 巻 25
2. 論文標題 コロナと子どもの貧困	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 33 ~ 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Yoshitake, Masumi Sugawara.	4. 巻 -
2. 論文標題 Dual-factor model of mental health : Latent growth curve analyses of psychosocial outcomes among japanese adolescents.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Medicine and Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉武尚美・菅原ますみ・松本聡子・城間彩花, 相澤仁	4. 巻 23
2. 論文標題 思春期の適応と修正アタッチメント体験の関連－児童自立支援施設における調査から－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 チャイルドサイエンス	6. 最初と最後の頁 29～34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原ますみ	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 貧困と子どもの発達	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外来小児科	6. 最初と最後の頁 111-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aline Jelenkovic, Reijo Sund, Yoshie Yokoyama, Antti Latvala, Masumi Sugawara, Mami Tanaka, Satoko Matsumoto et al	4. 巻 10
2. 論文標題 Genetic and environmental influences on human height from infancy through adulthood at different levels of parental education	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-020-64883-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 榎原洋一	4. 巻 783
2. 論文標題 虐待が乳幼児期の子どもの心身の健康に与える影響(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榊原洋一	4. 巻 784
2. 論文標題 虐待が乳幼児期の子どもの心身の健康に与える影響(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榊原洋一	4. 巻 785
2. 論文標題 虐待が乳幼児期の子どもの心身の健康に与える影響(3)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ	4. 巻 68(3)
2. 論文標題 思春期の注意欠如・多動傾向と不安・抑うつとの縦断的関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 237-249
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep.68.237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齊藤彩	4. 巻 23
2. 論文標題 親の自閉症的行動特性と養育における困難との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉武尚美	4. 巻 6
2. 論文標題 大学生の新型コロナウイルス感染予防行動に関連する心理社会的要因 - ヘルスブリーフ・モデルに基づく検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 順天堂グローバル教養論集	6. 最初と最後の頁 103-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤曜子	4. 巻 3
2. 論文標題 被逆境体験 (ACE) という視点からみた親子が健やかに家庭で生活できるプログラム 第3章 各委員からの意見	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本財団	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 齋藤彩・松本聡子・吉武尚美・菅原ますみ
2. 発表標題 大学生の注意欠如・多動傾向とコロナ禍におけるストレス、抑うつとの関連
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原ますみ・田中麻未・齋藤彩・松本聡子
2. 発表標題 小児期体験と成人期前期における不適応的パーソナリティ傾向との関連 内在化型問題への媒介モデルの検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂田侑奈・齋藤彩・吉武尚美・松本聡子・菅原ますみ
2. 発表標題 大学生の自閉スペクトラム症特性と抑うつとの関連 新型コロナウイルスに対する恐怖を媒介要因とした検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉武尚美・菅原ますみ・松本聡子・齋藤彩・坂田侑奈
2. 発表標題 ネット上のサポートと大学生の精神的健康 E-Support尺度の実証的検討を通して
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, S., Kawashima, A., & Sugawara, M.
2. 発表標題 Household Chaos and its Relation to Children's Outcomes in Japan. Poster session at the, Salt Lake City, U.S.A, 2023.3.
3. 学会等名 The Society for Research in Child Development 2023 Biennial Meeting (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kawashima, A., Matsumoto, S., & Sugawara, M.
2. 発表標題 The trajectories of marital intimacy among Japanese couples: A dual trajectory approach,
3. 学会等名 The Society for Research in Child Development 2023 Biennial Meeting (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshitake, N., & Sugawara, M.
2. 発表標題 Fear and the Perceived Stress associated with COVID-19 pandemic: The Moderating Effect of Online Support.
3. 学会等名 The Society for Research in Child Development 2023 Biennial Meeting (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅原ますみ
2. 発表標題 シンポジウム, 貧困・低所得と子どもの発達
3. 学会等名 第68回日本小児保健協会学術集会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原ますみ・松本聡子・齊藤 彩・吉武尚美
2. 発表標題 コロナ禍での大学生の精神的健康と小児期体験
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原ますみ
2. 発表標題 ラウンドテーブル指定討論者, 離婚家族への縦断研究の必要性と可能性
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原ますみ
2. 発表標題 シンポジウム, 家族の健康とQOLに関する長期縦断研究 子ども期の“しあわせ”をめぐって
3. 学会等名 お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構 国際シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齊藤彩
2. 発表標題 大学生の発達障害特性とコロナ禍におけるメンタルヘルスに関する検討
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第27回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉武尚美
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染予防行動のヘルスピリーフモデル: 大学生と成人を比較して
3. 学会等名 日本健康心理学会第33回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤曜子
2. 発表標題 18歳の壁を超えることの意味 途切れない支援を保障するために
3. 学会等名 日本子どもの虐待防止学会第26回いしかわ大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齊藤彩・佐藤みのり・坂田侑奈
2. 発表標題 親子の注意欠如・多動症的行動特性と養育ニーズに関する検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 ジェニファー・ヘイズ＝グルード、アマンダ・シェフィールド・モリス、菅原 ますみ、榎原 洋一、舟橋 敬一、相澤 仁、加藤 曜子、松本 聡子、室橋 弘人、川島 亜紀子、田中 麻未、吉武 尚美、齊藤 彩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 小児期の逆境的体験と保護的体験	

1. 著者名 我部山 キヨ子、菅原 ますみ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 288
3. 書名 基礎助産学[4] 母子の心理・社会学 第6版	

1. 著者名 相澤 仁、酒井 厚、舟橋 敬一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 292
3. 書名 アセスメントと養育・家庭復帰プランニング	

1. 著者名 子ども虐待の予防とケア研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 第一法規	5. 総ページ数 -
3. 書名 子ども虐待の予防とケアのすべて（追録37号）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	相澤 仁 (Aizawa Masashi) (00754889)	大分大学・福祉健康科学部・教授 (17501)	
研究分担者	榭原 洋一 (Sakaihara Yoichi) (10143463)	お茶の水女子大学・ ・名誉教授 (12611)	
研究分担者	室橋 弘人 (Murohashi Hiroto) (20409585)	金沢学院大学・文学部・講師 (33305)	
研究分担者	川島 亜紀子(小林亜紀子) (Kawashima Akiko) (20708333)	山梨大学・大学院総合研究部・准教授 (13501)	
研究分担者	舟橋 敬一 (Funahashi Keiichi) (30383269)	埼玉県立小児医療センター(臨床研究部)・精神科・副部長 (82412)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 聡子 (Matsumoto Satoko) (30401590)	お茶の水女子大学・人間発達教育科学研究所・講師 (12611)	
研究分担者	齊藤 彩 (Saito Aya) (30794416)	お茶の水女子大学・基幹研究院・助教 (12611)	
研究分担者	吉武 尚美 (Yoshitake Naomi) (40739231)	順天堂大学・国際教養学部・准教授 (32620)	
研究分担者	加藤 曜子 (Kato Yoko) (90300269)	流通科学大学・人間社会学部・非常勤講師 (34522)	
研究分担者	田中 麻未 (Tanaka Mami) (90600198)	千葉大学・社会精神保健教育研究センター・特任講師 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関